



Title	講演会総括：ポストコロナにおける科学技術コミュニケーターの姿勢と覚悟
Author(s)	松王, 政浩
Citation	科学技術コミュニケーション, 29, 127-130
Issue Date	2021-08
DOI	https://doi.org/10.14943/99338
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/82472
Type	departmental bulletin paper
File Information	JJSC29_127-130_MatsuouM.pdf



講演会総括 ～ポストコロナにおける科学技術コミュニケーターの姿勢と覚悟～

松王 政浩¹

General Overview: Attitude and Preparedness of Science and Technology Communicators in the Post-Corona

MATSUOU Masahiro¹

要旨

2020 年度 CoSTEP 修了式の記念講演会で、西浦博先生、岸田直樹先生に、コロナ禍での科学技術コミュニケーションの意味についてご講演いただいた。未曾有のパンデミック下で、社会に向けていかなる情報発信の形が重要かについてお話いただいたが、同時にお二人の話には、この機に市民を含む社会的構成員の「役割」の再確認、再構築が必要だというメッセージが含まれていたように思う。この「役割論」は、熟議をさらに進める上でも、今後の科学技術コミュニケーションの重要な課題となるだろう。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、役割の線引き問題、熟議、科学哲学、科学技術コミュニケーター

Keywords: COVID-19, demarcation problem with roles, deliberation, philosophy of science, science communicator

1. はじめに

ご紹介いただきました、オープンエデュケーションセンター・センター長をしております松王です。まずは、本日修了される CoSTEP 受講生の皆さん、修了おめでとうございます¹⁾。また、CoSTEP 修了式に大変相応しい、示唆に富むお話をしていただいた西浦先生、岸田先生、どうもありがとうございます（西浦 2021; 岸田 2021）。今回の記念講演では、いま社会的関心の最も大きな課題の一つと言える新型コロナウイルス感染症、それから、より広く感染症一般、



図1 オンラインで講演した著者

2021年7月1日受納 2021年7月2日受理
所 属：1. 北海道大学大学院理学研究院
連絡先：matsuou@sci.hokudai.ac.jp

そして医療・治療をめぐる今後の深刻な問題に対して、社会がどういうふうに向き合うのかということについて、お二人の先生にお話を伺いました。そして、二人の先生から、いずれも科学技術コミュニケーション、あるいはコミュニケーターに対する大きな期待と、コミュニケーション上の課題についてもお話いただきました。

まず、お二人の先生方が期待される通り、特にこうしたパンデミック時の社会的な対応を考える上で、科学技術コミュニケーションという側面が極めて重要であるということは間違いのないことだと思います。これは、科学技術コミュニケーションに直接携わられておられる、そして様々な課題に直面して、それを乗り越えてこられたお二人のような専門家だけにとつて重要なものでは決してありません。例えば、いまの政策は必ずしも明確ではないとか、あるいは緊急事態宣言の延長ということで今後どうしていけばよいのか分からない——こういった不満を持っておられる皆さんにとつても、科学技術コミュニケーションの重要性は感じられることだと思います。では、今後、どういうふう科学技術コミュニケーションを改善していけばよいのでしょうか。このことについてお二人から具体的なご提案をいただいたと思います。

2. 西浦先生講演の総括～科学と政策～

まず、西浦先生からは、ご自身の経験に基づいて、英国にあるような首席科学顧問 (the Government Chief Scientific Adviser)、つまり、その政策に対して科学的な提言を行う専門職、それを日本でも設置して、さらには専門のコミュニケーターが科学と政策を結びつけるような体制を築くべきだというようなご提案をいただきました。すでに日本の国会でもこうしたことは数年前から議論されているところではあるのですが、西浦先生がおっしゃるように科学の扱いが日本ではまだ「幼弱」な状態で、まだこれについては具体的な話が進んでおりません。

3. 岸田先生講演の総括～エトス、パトスを伴う情報発信～

岸田先生は、これまで、医療関係者または一般市民に向けてインフォデミック²⁾という観点から様々な情報の整理、発信をされてきました。まさにご自身が感染症の専門家としてコミュニケーションの改善に努めてこられたわけです。例えば、ワクチン接種についての医療者による適切な理解や、あるいは、薬剤耐性にかんする一般の人々による適切な情報の獲得といった事例について話していただきました。その際には、アリストテレスを引き合いに出されて、論理 (ロゴス) だけではなく、エトス、パトス³⁾の側面が重要であるというお話をいただきました。また、そうした三つの要素を備えたコミュニケーション、それを担うためのエキスパートが必要だというお話をいただきました。実は、私はバックグラウンドが哲学なので、ここでそのようなお話が出てきたのは大変嬉しいことでした。また、最後に人口動態変化を見据えた上で、今後の医療受給の不均衡について、国民性も考えながら科学技術コミュニケーターが医療専門家と一緒に情報発信をしていくのがよいというお話もいただきました。

4. 講演全体の総括

～社会的成員の役割の再構築と、役割の線引き・踏み越えの問題～

また、西浦先生と岸田先生どちらの提案にも含まれている重要な点として、パンデミック、あるいはそれ以外にも私たちが今後直面する可能性のある医療に関する重大な問題に対して、市民を含

んだ社会的構成員の役割の確認,あるいはその再構築が必要だという点が含まれていたと思います。この役割の再構築ということには、「誰が誰に対して、どのような情報を発信する」のか、あるいは個々人がどういうふうに行動を変えていくのかということも、もちろん含まれていると思われます。

この役割の再構築ということについては、すでに90年代ごろから、アセスメントとマネジメントの二分法だけでは、現実問題への適切な対処は決してできないということが言われてきました。リスクの対象が、発がん性物質のような影響が限定的なものだけでなく、環境の問題など、影響が広範囲に影響が及んで対応の難しい問題が増えるなかで、「課題→分析→政策」という単純な意思決定プロセスが成り立たなくなってきたわけです。そのような状況で、新たにキーワードとして熟議(deliberation)という言葉、考え方が出てきて、その中で話が進んでいくように見えました。この「熟議」というのは、いろいろな立場の人が横断的に議論をする、そして、その中で物事を決めるということです。

確かに、その趣旨は非常に素晴らしい。しかし、結局のところ、従来の紋切り型の固定的な役割論は崩しましたが、政策立案者あるいは科学者なり市民に求められる役割の再構築についてはあまり話は進んでこなかったのではないかと思います。この「再構築」という中には、先ほども言った「誰が、誰に、どう伝えるか」という、伝え方の再構築という部分ももちろん含まれます。つまり、科学技術コミュニケーターは熟議の考え方だけに決して甘んじてはいけないということです。このようなメッセージを、お二人のお話を伺って、私自身は非常に強く感じました。

そして、「新たな役割の再構築に、実践面でも、また利用面でも、コミュニケーターが貢献すべきだ」というメッセージを、私自身は受け止りました。これは非常に大きな課題だと思います。役割の再構築を本気でやるためには、役割の線引き問題ということに当然ながら踏み込まざるを得ないわけです。この問題には、西浦先生がおっしゃっていたような、科学者がそこまで社会にメッセージを発するべきではないとか、そういった踏み越えの問題というのも当然含まれているわけです。例えば、その踏み越えを回避するために中間的な専門職を置くというのが一つのアイデアとしてあるわけですが、そこにまた当然、中間的な専門職と科学者、あるいはその政策立案者との間に、新たな踏み越えの問題が生じる可能性というのが当然ながらあるわけで、問題は非常にややこしいわけです。こうした、ややこしい、なかなか答えの出ない問題、あまり誰も率先して論じようとはしない問題については、これまで世の中の関心が高まることはなかった。あるいは、誰かが声を挙げてそういったことを論じようとしても、なかなかそのあとにうまく議論が続いて行かないということがあったと思います。

5. 結語～科学技術コミュニケーションの転機としてのパンデミック～

先ほど、私はバックグラウンドが哲学だと言いましたが、特に専門としているのは、「科学哲学」という非常にマイナーな分野です。その科学哲学ではこういった問題を1950年代ぐらいから、一部、細々と論じてきたということがあります。科学者が行う科学的判断の中に、社会への影響を考慮した価値判断が含まれるか否か、つまり科学的判断は価値中立であるかどうか、というのがそのテーマです。哲学ですので、そもそも価値判断とは何か、科学者の責任とは何かといった視点をもとに議論され、いまでも論争が続いています⁴⁾。

しかし、今まさにこういった問題を決してマイナーな問題ではなくて、メジャーな問題にすべきであるということなのだと思います。パンデミックの問題というのは、これは社会にとって大きな転機であると同時に、科学技術コミュニケーションにとっても大きな転機です。その中で科学技術コミュニケーションに携わる者が、どのような姿勢と覚悟を持つべきなのか。今日のご講演から、

大変重要な示唆をいただきました。修了者の皆さんは、ぜひこれを今後の糧としていただきたいと思います。

また、この講演会に一般参加いただいた全国の皆さま、最後までご視聴いただいて、ありがとうございました。このご講演が皆さまの科学技術コミュニケーションに対するご関心の深まりに繋がることを期待しまして、また、明日の皆さまの日々の生活における考え方のヒントとなりますことを期待いたします。

西浦先生、岸田先生、貴重なご講演、どうもありがとうございました。

注

- 1) 本稿は2021年3月13日に開催された2020年度CoSTEP修了式特別プログラムの記念講演「ポストコロナの科学技術コミュニケーション」の総括としての講演をまとめたものである。記念講演の詳細については川本(2021)を参照。
- 2) 「Information (情報)」と「Epidemic (疫病などの流行)」からなる造語で、特にインターネット上で真偽不明の情報やデマが広まり、現実社会に影響をおよぼす現象のこと。
- 3) 岸田(2021: 119-120)を参照されたい。アリストテレスによる区別はアリストテレス(2017)に基づく。
- 4) 価値判断をめぐる科学哲学の論争、ならびに「役割の線引き問題」については、松王(2020)を参照されたい。

文献

アリストテレス 2017: 堀尾耕一(訳)『弁論術・詩学』岩波書店。

川本思心 2021: 「小特集序文: ポストコロナの科学技術コミュニケーション」『科学技術コミュニケーション』29, 95-99。

岸田直樹 2021: 「支え、つなげるための情報発信～地域の感染症コンサルタントの立場から～」、『科学技術コミュニケーション』29, 107-125。

松王政浩 2020: 『科学哲学からのメッセージ 因果・実在・価値をめぐる科学との接点』森北出版。

西浦博 2021: 「今、そしてこれから何が求められるか～COVID-19対策に関する科学技術コミュニケーションの経験から～」『科学技術コミュニケーション』29, 101-105。